

(国語)

「主体的に学び、対話を通して考えを深める子どもを育てる」

～国語科における「話す・書く力」を通して～

大阪市立海老江東小学校 研究・研修部

1. 研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標「豊かな心を育み、たくましく生きる力を養う教育活動を推進する」を基に、子どもの意欲的・主体的な活動を大切に、毎日学校に行きたいと思える「ウェルビーイング」な学校づくりを推進している。児童は、落ち着いた学習環境の中、地域の方々に温かく見守られ、素直で何事にも一生懸命に取り組む姿が見られる。

令和2年度から研究主題を「主体的に学び、対話を通して考えを深める子どもを育てる」とし、研究教科に「国語科」を取り上げ、「話す・書く力」を伸ばす指導を中心に研究を進めてきた。また、令和4年度からは研究教材を物語文に統一し、ことばの力を伸ばすための工夫を行いつつ、指導者の発問や支援のあり方を視点に挙げ、児童一人ひとりの多面的・多角的な考えを引き出す工夫に取り組んだ。そして、受け手を意識して自分の考えを表現するための話す力や書く力を伸ばすことができる授業を目指して、5年にわたり国語科の授業実践をして積み上げてきた。

児童の「わかった・できた」の体験を増やすことで、他教科のみならず様々な場面での活動意欲の向上につなげることができる。また、新しいことにも「やってみよう」とする心が育ち、学ぶことの楽しさを味わうことができるだろう。そして、話し合い活動の充実によって、様々な意見を知り、物事をより多面的な見方で考える力を伸ばすことができると考え、本年度は研究主題を「主体的に学び、対話を通して考えを深める子どもを育てる」とし、さらに「主体的・対話的・深い学びを意識した基礎基本の定着の工夫」を視点として指導していくという研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

昨年度までの研究では、「叙述に基づいて自分の意見をもつことができるようになり、対話を通してより多様な意見が出るようになった」や「聞き方や話し方のモデルを提示したり、それを生かしたグループ活動や全体交流を設定したりすることで、意欲をもって話すことができた」などの成果を得ることができた。また、今後の課題として、「1人で考え、自分の考えをもつことができるような課題や場の設定の工夫」や「文章や図でまとめて書く力に個人差が大きいので、さまざまな成果物を交流し、参考にできる機会を設ける」などが挙げられた。

また、本年度の研究の進め方として、国語科で5年目の研究となることに加え、本年度は教科書改訂の年でもあり、いくつかの方向性が考えられるなかでのスタートとなった。新しい教材での研究や単元の縦のつながりでの研究を進めながら、同一教材・同一本時の研究を繰り返すという方向性を校内全体で共有し、昨年度以前での研究授業の発問を再度検討・精選し練り上げるという研究を行っていくこととした。発問の文言や出すタイミングの精選は、「1人で考え、自分の考えをもつことができるような課題や場の設定の工夫」という本校の課題解決に沿うと考えたからである。

昨年度の課題や研究の方向性を踏まえ、本年度は、「児童1人ひとりが自分の考えをもつことができるような課題設定や指導者側の支援の工夫」や「自分の考えや話し合っったことを文章にまとめ、表現することができる力を伸ばす」を中心に、研究を進めていくこととした。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 主体的・対話的・深い学びを意識した基礎基本の定着の工夫

- 受け手を意識して、自分の考えを表現するための話す力や書く力を伸ばす工夫
→自分の考えや話し合ってわかったことを文章にまとめ、表現することができる力を伸ばすために、学習活動の展開の工夫や言語活動の工夫を行う。
- 多面的・多角的な考えを引き出すことができるような発問の工夫や、「わかった」「できた」につながる意見交流と指導者の支援のあり方
→児童1人ひとりが自分の考えをもつことができるような発問を精選し、課題設定を行う。また、話し合い活動のなかでの指導者側の支援の仕方やその工夫について研究する。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 同一教材・同一本時の研究を繰り返すことで、発問の精選を行うことができた。発問の文言や出すタイミングで、児童の思考の流れが大きく変わることが改めてわかり、多面的・多角的な考えを引き出すための発問を練り上げることができた。
- 1人で考える時間を十分確保することが効果的であった。1人で考え、意見をまとめる時間を確保することで、考えの根拠やそう考えた理由についてより深く考えることができ、その後の話し合い活動に活かすことができた。
- 話し合い活動において、話型の提示や話し合い活動の形態の工夫が効果的であった。低学年では、活動中の役割を分けることで、反応や感想の伝え合いをより効果的に行うことができた。また、高学年では、薔薇型などの話し合い活動の形態の工夫を行うことで、話し合い活動への主体性が増し、より言語活動が活発になった。
- 児童の実態に応じたワークシートの工夫や書き方の提示をしたことにより、叙述に基づいて自分の意見をもつことができるようになった。書くことに苦手意識がある児童も、登場人物になりきる書き方をすることにより、自分の考えを書くことができるようになった。

(2) 今後の課題

- より受け手を意識した考えの発信について追究していく必要がある。誰に何を伝えるのかを明確にし、反応を見ながら話したり、伝わりやすい言葉を選んで書いたりすることを意識できるようにする。そのために、音読や朗読の聞き合いやさまざまな成果物を掲示する機会を設け、相互評価する活動を行っていく。
- 多様な意見に触れることができるようになったが、友達の意見を受けて自分の意見と比較し、考えを伝えるまでに至っている児童は少ない。多面的・多角的な話し合い活動から、自分なりの意見や感想をもつことができるようにする活動を引き続き続けていく。